

秋之部

中村俊定文庫

文庫 18

304

3



福



六々庵集卷三

如是庵理然輯



挽之部

立役

好まや夕日の山君今終るを  
水まやさやふらやの柳の葉  
新形北ぬりふらやふらの旗  
等々のの 貴所 形や今終るを

舞臺や異心もいふるは打  
 姑らりや登りりもたふと  
 さし多うしよ後いさや舞の  
 帷子の揺揺りりやうは秋  
 舞臺やささすらふおとし  
 舞臺や聖中の井戸のつね  
 舞臺やうとうと舞臺やそら  
 田も細かぬしおやまの  
 舞臺や

一りはく舞のつらや水の  
 舞臺や牛のきぬのきし  
 又音の舞い舞臺や秋の  
 舞臺やうとうと舞臺よくの  
 舞臺のくしき舞臺やとく  
 拾得の舞臺のきぬのきし  
 舞臺のきぬのきぬのきし  
 舞臺のきぬのきぬのきし  
 舞臺のきぬのきぬのきし

鳥川きし小娘の舞臺を  
 舞臺を舞臺のきぬのきし  
 舞臺のきぬのきぬのきし

三六  
五七  
多岐路の舟をよかりぬ積りてまきひ  
ゆるを流しよし—しらけふをまらしく

あゝりや夜を—流る水の音

お世を—

夕し水や流るり—なごり

一葉

つらつら—やせれり—あゝ

—の—

けつめつ果つらりん 帆之貝

彼名り入るねきゆたふ忍上の一也  
おまけに自解後とよまぬ—

おのまおれら—や解後を目めつらん

十株—の—

なぬ—おと—を離るらん

るふ

帷子のあまや—おまふ—

武徳士の意母—を—

人—の—あゝ—

扇柳

燕をふるまぐちりや川柳  
作心より理くるはく柳ん  
えししくそくししく扇柳

七夕

七夕の夜と無世縁と草枕  
早合ふし近道はせんき柳山  
七夕や秋風風、空うある

七夕や花かすも糸のころ  
織姫や近道と捨と鏡やま  
七夕のりや媒と空のころ  
お見も声まねる柳や星の恋  
新柳一浪きりや早あしころ  
七夕や川の向ひし柳の家  
七夕の娘恋もあはれさり  
七夕や涙あふしころ月のみ

早合やこのふゆのつらさの目  
 織女や柳の糸を居るうら  
 セツカや柳ふ鞠をうら  
 セツカや早を日影のたひぬ  
 せむしを糸掛えはるん女帯を  
 セツカや川のささ里きさのさ  
 セツカのたひをぬるんうら  
 セツカや子ありの行違や早のさ  
 早のふゆをうらうら  
 酒壺のささうら  
 春のうらぬぬも早のうら  
 帷のうらうら  
 思ふ程のうらうら  
 七ツの晴

山田新多のうらうらのたひ

つゞくりつ成社きぬくり星

鏡中のセタハ何と云へどもおふゆはふ  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

早〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

大井川

鏡中〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

三川のふきあひの語り〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

早〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

西をふふ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

おぢ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

早〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

可〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

七夕の年〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

鏡中

早〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

早〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜



雷くし野野鈴も何り 泥手はけり  
 石をききほくたけくしをこころいふれ  
 遠くへ一彦まはゆるん 泥まきりり  
 善くまてく 神も精や 泥まはまよ  
 めさし 新りりもまをり 泥まきりり  
 精くし 葉もあつ 妙もろりり 泥まよ  
 精進の妙もまきりり 泥まきりり  
 著くし ぬまもまきりり ぬまも  
 泥まきりり 何れもまきりり

泥まきりり 何れもまきりり  
 初めははくし 神も精や ぬまの中  
 神も精のまきりり 何れもまきりり  
 一人もまきりり 何れもまきりり

遠くへ一彦まはゆるん 泥まきりり

七 八 又 泥のまきりり

遠くへ一彦まはゆるん 泥まきりり

後行し 泥まきりり 父も精もまきりり  
 をけあの人もまきりり

のつらき一ひつら

丁方の津よりや 藤の暮きまひり

藤のつら

あまふく 抱合々の 藤を 枝の 卯

籠筆

籠のつらきく 藤の 打籠の 卯

くくつらあひ 似合ぬ 籠筆の 卯

あまふく 抱合々の 藤を 枝の 卯

抱合の 修連を 暮きまひり 打籠の 卯

打籠の 藤の 卯の 打籠の 卯

あまふく 抱合々の 藤を 枝の 卯

あまふく 抱合々の 藤を 枝の 卯

打籠の 藤の 卯の 打籠の 卯

あまふく 抱合々の 藤を 枝の 卯

打籠の 藤の 卯の 打籠の 卯

あまふく 抱合々の 藤を 枝の 卯

灯の中へ一羽。是を成切毫の部

意中の後

百の長の上もあやそへ一羽打毫

論

り影のつた中折一羽の部

論の中へ成合の時は 九 採

記の中へ二人の中へ一羽の部

論の中へ成合の時は 九 採

論の中へ成合の時は 九 採

人形をばつてつるを

論の中へ成合の時は 九 採

論の中へ成合の時は 九 採

論の中へ成合の時は 九 採

論の中へ成合の時は 九 採

論の中へ成合の時は 九 採

論の中へ成合の時は 九 採



宿のよみ川原のあけのけりやあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

後紅冠のあはれあはれあはれあはれ

國のあはれあはれあはれあはれあはれ

奉入

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

俵 二章

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

遊音 二章

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

を列にけ川の宿うくまのふりし  
ひらたけちま

あふまふまふあふまふあふまふあふまふあ

まふまふあ

あふまふあふまふあふまふあふまふあ

あふまふあ

あふまふあふまふあふまふあふまふあ

あふまふあふまふあふまふあふまふあ

あふまふあ

あふまふあふまふあふまふあふまふあ

あふまふあふまふあふまふあふまふあ

あふまふあ

あふまふあふまふあふまふあふまふあ

あふまふあふまふあふまふあふまふあ

あふまふあふまふあふまふあふまふあ

あふまふあふまふあふまふあふまふあ

あふまふあ

推しつゝ驚も時や女帯を  
夏つねのほろほろと女帯を  
赤く入るる女帯を  
驚くは毒のしるし女帯を  
泣けのやれはひとあはれ

新形

新形はつらつらぬぬとく  
新形のやうなつらぬぬとく  
あつらひつらぬぬとく  
新形はつらつらぬぬとく  
新形はつらつらぬぬとく  
新形はつらつらぬぬとく  
新形はつらつらぬぬとく  
新形はつらつらぬぬとく  
新形はつらつらぬぬとく  
新形はつらつらぬぬとく

新形よりしつゝくもあつらん

新形

新形やあふりもふあ信さ

子姓

そとくふの如くそ新の身

無名一はるのやうりもあつらん

是弱しつゝくもあつらん

沖のあつらんお新や新の身

後ねあつらん

あつらんやうりもあつらん

あつらん

あつらんあつらんあつらん

菊

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん



魚のけりあき

葉のまやまこ切之の底より

頭を煮 草む

世の屋中とくたえぬるやゆん

草むのを煮たりあやゆん

振種

ゆゆゆゆ折目たりき振種

ゆゆゆゆ折目たりき振種

ゆゆゆゆ折目たりき振種

ゆゆゆゆ折目たりき振種

萩

萩の葉やあふはぬゆのま

萩の葉やあふはぬゆのま

萩の葉や

萩の葉やあふはぬゆのま

萩の葉や

そねの結のまゝのさへは——あまののち

虫

草のゆら——なげやぬさめやその声  
やゆや。ゆらうらやうは——いと  
そねの野——啼——ややあれあ  
なまらうさうまけらら——の声  
そねの——あははらや——なま

鴉

い——い——なまを——きりくは  
ゆらりなまを——啼——鴉  
うらなま——やなまのまら——

鴉 鴉の録

ゆやい。ゆら——なまを——啼  
なまなま——なまはま——なまの録

女の子

ゆまのなまのほら——のこ

善く振るゝの如く此の如く

頭珍色 促哉

珍色や声の細く成振くる

書物も様々なりりるの

頭善色 始端

善色の声やしるすもさるる

かゝるゝらふせしむる振る

珍色

草紙の多し陣のや刷毛は

此の如くさるる

此の如くさるる

珍色

珍色の多し陣のや刷毛は

此の如くさるる

此の如くさるる

西色

六六

あなまのころころころころころころころ  
てのののののののののののののののの  
おのののののののののののののののの  
葡萄のころころ

流るるの流るるを流るるの流るるを流るる  
おのころのころころころころころころ

あなまのころころころころころころ

あなま

あなまのころころころころころころ

あなまのころころころころころころころ  
おのころのころころころころころころ

あなまのころころころころころころ

あなまのころころころころころころころ  
おのころのころころころころころころ

あなまのころころころころころころ

あなまのころころころころころころころ  
おのころのころころころころころころ

あなまのころころころころころころ

あなま

六六

六

七

よ〜〜町の中や 花の匂  
三〇〜〜花の匂や 山の晴  
己而き

〜〜花の匂や 山の晴

その所は花の匂や 山の晴  
花の匂や 山の晴

よ〜〜花の匂や 山の晴

その所は花の匂や 山の晴  
花の匂や 山の晴

よ〜〜花の匂や 山の晴

その所は花の匂や 山の晴  
花の匂や 山の晴

よ〜〜花の匂や 山の晴

その所は花の匂や 山の晴  
花の匂や 山の晴

よ〜〜花の匂や 山の晴

その所は花の匂や 山の晴  
花の匂や 山の晴

よ〜〜花の匂や 山の晴

その所は花の匂や 山の晴  
花の匂や 山の晴

よ〜〜花の匂や 山の晴

六

七

丁六  
目録のなすははあぢのしんせん

ねのちくれらるーやほほほほのあ

持接二る 印さる

一二の目くもらさるやる乃ほ

多代の花さーやはた七竹ハ竹

増物のから

ね木の中やほら乃沖はほ

あつるさうの方ちあふーくーめさるさうにけ  
えい道とあるさあしーもーさるうーん

本代そのまうーあけのさ平明あほ  
けーくーしーあもーさあさあ

なーくーくーを 並 団砂美

あふさる

ねめやらるー向くもほらる

らあさる

春つほらるやほあさるさるほ

ニあさるあさる

ニあさるあさるほ七れあーあ

六  
た

花丸の歌

花をまきしゆりもりし花巻は原

花の歌の歌

花の歌の歌をよめよ

花の歌や花巻は原

花巻

花の歌よ花巻は原

花巻は原

花の歌や花巻は原

花巻は原

花の歌や花巻は原

花丸

花の歌や花巻は原

花の歌や花巻は原

花の歌や花巻は原

花の歌や花巻は原

六

七

六

まじりぬき一多指と八に頼るまゝ  
うきなり傳へしつゝぬれあるり

心をとまへ一かまの縁をばやれぬ

雑風

指をぬきぬきちり一雑風をいふ

因る座も座をこゝろや雑風の風

新地や雑風をよほくぬき座を

雑風をいふ

いづるのつゆとささるぬの風

雑風をいふ

因る座一雑風をいふ

雑風をいふ

こゝろを雑風をいふ

雑風をいふ

雑風の風をいふ

雑風の風をいふ

雑風の風をいふ

六

六





岸の波の音も一途のまをうらみの目  
を流るる水も流るるまをうらみの目  
うらみの目や水の流れはれどわが  
物もささくもささくもささくれど  
うらみの目もささくも流るるまの目  
草もささくもささくもささくも  
うらみの目も流るるまの目  
うらみの目も流るるまの目  
うらみの目も流るるまの目

岸の波の音も一途のまをうらみの目  
を流るる水も流るるまをうらみの目

十里もささくもささくもささくも  
うらみの目も流るるまの目

十里も

うらみの目も流るるまの目  
十里もささくもささくもささくも  
うらみの目も流るるまの目

十里も

十里も

十日舟中 夜の星は輝きし如き

舟のるる月をいふ春——十日日

晴風のぬけけり舟中夜をいふ  
舟のるるの情もつらひき

舟中の海人よそはるるれりの又

るる

舟中の夜はのどろ——ある月をいふ

舟中

舟中よ夜は静なり月をいふ

舟中よ舟の静けさよ月をいふ

舟中の海は静なり月をいふ

舟中の星は静なり月をいふ

舟中の月をいふ静けさよ

舟中よ舟の静けさよ 雲 霧

舟中の静けさよ舟をいふ

舟中よ舟の静けさよ舟をいふ

舟中よ舟の静けさよ舟をいふ

舟中  
舟中

ありしや春々し梅影の百人一首  
 折る底のよのらるるうらぶの月  
 名日や海川ぬきり斗屋所  
 ありしや百り如のそまを言  
 ありしやあし路屋のうらむるさ  
 百あし一草とよりぬく今この月  
 ありしやうらなみ里とま せ境  
 うらなみの月とぬきりやぬきり

ありしやははらけりしや夜のは  
 ありしや梅実新きの流るる  
 ありしのおやうはしれを望  
 ちきりし一幅けりし草の月  
 ありしはうらむるしり物屋の  
 流るるしとけりしあまの月の  
 ありしはうらむるしり物屋の

ありしはうらむるしり物屋の  
 ありしはうらむるしり物屋の

中なるものたもさるのさるふりりりり

羅くくくくくくくくくくくくくくくく

中なるの里れりりりり

折くくくくくくくくくくくくくくくく

中なるのたもさるのさるふりりりり

折くくくくくくくくくくくくくくくく

中なるの里れりりりり

折くくくくくくくくくくくくくくくく

中なるのたもさるのさるふりりりり

折くくくくくくくくくくくくくくくく

中なるのたもさるのさるふりりりり

折くくくくくくくくくくくくくくくく

中なるのたもさるのさるふりりりり

折くくくくくくくくくくくくくくくく

折くくくくくくくくくくくくくくくく

折くくくくくくくくくくくくくくくく

十三年

十三年やうねあそ人七年うま

十三年やまうううのうまうま

うまうまやんをぬをすの風の時

十三年やうううのむれちり神

うまうまやんをぬをすの風の時

十三年やんをぬをすの風の時

うまうまやんをぬをすの風の時

うまうまやんをぬをすの風の時

うまうまやんをぬをすの風の時

うまうまやんをぬをすの風の時

うまうまやんをぬをすの風の時

うまうまやんをぬをすの風の時

うまうまやんをぬをすの風の時

うまうまやんをぬをすの風の時

うまうまやんをぬをすの風の時

三行のしやんをぬきかきつる

三行のしやんをぬきかきつる  
十行のしやんをぬきかきつる

三行のしやんをぬきかきつる

五行のしやん

三行のしやんをぬきかきつる

途中のしやん

三行のしやんをぬきかきつる

三行

三行のしやんをぬきかきつる

三行のしやんをぬきかきつる  
はくしやんをぬきかきつる

三行のしやんをぬきかきつる

三行のしやん

三行のしやんをぬきかきつる

三行のしやんをぬきかきつる

三行のしやんをぬきかきつる

三行のしやんをぬきかきつる

親の志也〜〜〜

中世の文藝の歴史

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜



若くはと尾張影くくくくくくく

手紙のありけんと書きたるはあはれとて  
あはれをそとくふはあはれとてくくくくく  
乃ち初く一妙なり揚灯籠の面をく  
書きたるはあはれと

多きとて今さら一月と揚灯籠

まほしくはあ

春のあはれくくくくくくく

今さら初春のあはれくくくくく  
けしきのはあはれくくくくく

引くくくくくくくくくく

春のあはれくくくくく  
まほしくはあ

あはれくくくくくくくくく

初春のあはれく

あはれくくくくくくくくく

あはれくくくくくくくくく  
あはれくくくくくくくくく  
あはれくくくくくくくくく  
あはれくくくくくくくくく

あはれくくくくくくくくく

あはれくくくくくくくくく



方々の新も 現や ちさき

其法 穠く

其法 穠く ちさき

其法 穠く

其法 穠く ちさき

其法 穠く

其法 穠く ちさき

其法 穠く

其法 穠く ちさき

其法 穠く

其法 穠く ちさき

其法 穠く

其法 穠く ちさき

其法 穠く

其法 穠く ちさき

其法 穠く

ア〜一をうや目の形にひ

境旭の影〜うをこりぬ〜

ミ〜押つ 剣や目の何と里

人丸の縁を

不の〜く〜ら〜や目の形〜

石成りの影

春〜月〜ぬ〜母〜感の着る何

優は寒の影の影〜

夕〜夕〜く〜機〜影〜影〜

を〜う〜干〜の〜影〜

夕〜夕〜りの〜二〜五〜や〜影〜一〜節

猿猴ふゆの月れ影を四葉

猿の〜成〜影〜〜あ〜う〜や〜ゆ〜の〜目

夕〜夕〜影〜入〜影〜〜影〜成〜影〜の〜目

夕〜夕〜影〜の〜影〜〜影〜や〜ゆ〜の〜目

夕〜夕〜影〜〜影〜の〜目〜影〜利〜根

夕〜夕

夕〜夕

約定

なや水のやるる目うら

りて待らや 龍もさうり

雲の舞人さきさき

新は原のさきさき

龍もさうり

なや水のやるる目うら

りて待らや 龍もさうり

約定

なや水のやるる目うら

りて待らや 龍もさうり

なや水のやるる目うら

約定

なや水のやるる目うら

りて待らや 龍もさうり

約定

三十一

三十一

おきおりのちやうの致し  
うらむおのむしを  
娘入の振をうらむ  
御ちも牛成つり  
おきおりのちやうの致し

芭蕉

さうくも物成るや  
おきおりのちやうの致し

おきおりのちやうの致し  
おきおりのちやうの致し  
おきおりのちやうの致し

芭蕉

おきおりのちやうの致し

芭蕉

おきおりのちやうの致し

芭蕉

ついでにゆるゆるとやうな感じ

あんなに

今頃より九十九の夜月ハなほ

川

川の底の輝き一みるにちかちか

のりきや 月一照らすと

あつたわ ちかちか

とき

きよのなれがし一せぬまは

ついでにゆるゆるとやうな感じ

きよれ葉のぬるく

新

わいさうの代のねの

あんなに

あんなに

あんなに

はるばるのちかへくよるる——きりう

神農の像

神農の首はさふ——きりう

自らの初道のなる

ねのちふれはるる——きりう

西の東

鶴の園を海ふらふ——きりう

美のちらるる——きりう

赤ら雲のせかい白りぬき——きりう

美のちらるる——きりう

美のちらるる——きりう

美のちらるる

美のちらるる——きりう

美のちらるる

美のちらるる——きりう

美のちらるる——きりう



万の千や新のいあうま  
 新の千振とこれ何れ  
 新のいね新のしり新のい  
 新のうむれ新の千九千九  
 新の千振むふはち目新のい

あえ

新のいね新のいね  
 新のいね新のいね  
 新のいね新のいね

新のいね新のいね  
 新のいね新のいね  
 新のいね新のいね  
 新のいね新のいね  
 新のいね新のいね  
 新のいね新のいね

あえ

新のいね新のいね

綿

鼻にけしう名をうらやま給さう  
ま深のいぬ化移さうま給さう  
まおのあうかぬさうま給さう  
客をくさのや胃のま給さう  
給さう一盤さうま給さう  
おさうのく人のま給さう  
ま中のまのちまや給さう

魂

川さのまぬまれまぬさ  
二階さうまけハ給りの給さう  
池さうまけハ給りの給さう  
脚さうまけハ給りの給さう  
一階さうまけハ給りの給さう  
まのさうまけハ給りの給さう  
まのさうまけハ給りの給さう  
まのさうまけハ給りの給さう

おんをきくもよき人の徳の  
川上の徳流すや水の  
音

信し物し言をきかんとや

勢

おんをきくもよき人の徳の  
川上の徳流すや水の  
音

西

おんをきくもよき人の徳の  
川上の徳流すや水の  
音

十のひたりの道もよき人の徳の

おんをきくもよき人の徳の  
川上の徳流すや水の  
音

おんをきくもよき人の徳の  
川上の徳流すや水の  
音

おんをきくもよき人の徳の  
川上の徳流すや水の  
音

ゆりあんなあそびの乳のあそびとも

一序

料理場へあやうくゆくゆくゆく

あそびやあそびやあそびのこころ

一序とあそびのあそびのあそび

代官あそび

代官あそびのあそびのあそび

あそび

あそびのあそびのあそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそびのあそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそびのあそびのあそび

あそび

あそびのあそびのあそびのあそび

あそびのあそびのあそびのあそび

よきものなりふきりてやー好め

きりてあまき

やういふの影をばえぬー海を

海をばえぬ影をばえぬー海を  
海をばえぬ影をばえぬー海を

きりてよきものなりてあまき

影をばえぬ

しるべきやしるべきなりてあまき

影乃る声なきなりてあまき

影をばえぬ影をばえぬ

影をばえぬ

影をばえぬ影をばえぬ

影をばえぬ影をばえぬ

影をばえぬ影をばえぬ

影をばえぬ

影をばえぬ影をばえぬ

影

影をばえぬ影をばえぬ

新編や小きなうらも上りくさす  
新編やありをまうらん。新編の

新編の二章一

新編のあはれもや新編の一位  
類白のうらもあはれもあはれも

二章

あはれもあはれもあはれもあはれも  
己のあはれもあはれもあはれもあはれも

作じつしあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
小きあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも

鹿の角のくしくくは鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく

白鹿の角のくしくく

くしくく鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく

くしくく鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく  
くしくく鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく

鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく

鹿の角

くしくく鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく

鹿の角

鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく

鹿の角

くしくく鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく

くしくく鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく

鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく  
くしくく鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく  
くしくく鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく  
くしくく鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく

くしくく鹿の角のくしくく鹿の角のくしくく

鹿の角のくしくく

新し〜は是し〜るをぬきあらしめ  
 空人の道〜絶法〜の如  
 折し〜いふ〜は〜  
 何れも〜いふの道〜  
 精進と精進〜  
 空の境川〜  
 空の境川〜

修行三年まきふらふらひ〜  
 修行三年まきふらふらひ〜

新し〜は是し〜るをぬきあらしめ

新唐書 魏

新し〜は是し〜るをぬきあらしめ  
 空人の道〜絶法〜の如  
 折し〜いふ〜は〜  
 何れも〜いふの道〜  
 精進と精進〜  
 空の境川〜  
 空の境川〜



新々何れにのち百もく航の舟

船歌

航く正のちやこる、ふ嶽

の信一航しこるや航しつ約

航しつ舟のちを揮く

航しつ舟のちを揮く

航しつ舟のちを揮く

航しつ舟のちを揮く

世の中や航しつ舟のちを揮く

望しつ舟のちを揮く

舟歌

航しつ舟のちを揮く

航しつ舟のちを揮く

航しつ舟のちを揮く

航しつ舟のちを揮く

舟歌

らんあゝのさゝし〜ちびっさ〜のう〜  
 陸路や 晴あう〜ふ〜  
 うんほ〜や〜ぬは 帰る〜

三六

あし梅もろ〜ち〜や〜のさ  
 九りさむの 作道なりさ〜のさ  
 草細や〜し〜は〜  
 若くはの 帯るや〜のさ

菊細や 枝の 礎れう〜  
 帯修〜ふ〜  
 し〜  
 う〜  
 さ〜  
 む〜  
 む〜  
 む〜



後段 日録

おののこけやきくき 鳴く所  
おののまの 入り度—— 鳥のま  
あまのまの 成をんをうり 後へ  
白をを 後へ—— 鳥の尻へ  
鳥の尻をうりあつ—— 今まの  
 中へ 怪をうり。  
 けう—— けうのうり—— まや 鳥のむ  
 柳ふり—— まく——

けのけ—— けのけ—— 鳴く 鳥のま

鳥のけのけをうりあつ—— 今まの  
 中へ 怪をうり。

ふま成 鳥のけのけ—— 鳴く 鳥のま

成所化 鳥のけのけ——

老のけのけ—— 鳥のけのけ

老のけのけ

おののけのけ—— 鳴く 鳥のま

鳥のけのけをうりあつ—— 今まの  
 中へ 怪をうり。

あまのこころをささぐりてはなれりうららさ

巴列きくこころのまきかき  
十條のまきかき

まのこころのまきかき

あまのこころ

あまのこころをささぐりてはなれりうららさ

あまのこころ

あまのこころをささぐりてはなれりうららさ

あまのこころ

あまのこころをささぐりてはなれりうららさ

あまのこころ

あまのこころをささぐりてはなれりうららさ

あまのこころ

あまのこころをささぐりてはなれりうららさ

あまのこころ

あまのこころをささぐりてはなれりうららさ

あまのこころ

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでに

種もつふわたりりる葉一ほり味

さつきのつち

ふやふやふやふやの葉を煮る

草刈のつち

さつきのつち——葉のふのつち

つち

ふやふやの葉や葉のさつはき

ふやふやの種やふやのつちを煮る

或人さつきのつちを煮る  
さつきのつちを煮る

さつきのつちを煮る

さつきのつち

ふやふやの葉や葉のさつはき

さつきのつち

さつきのつちを煮る

さつきのつち

さつきのつちを煮る

ねのよきとほしきかほしくなるよし  
ねのよきとほしきかほしくなるよし  
ねのよきとほしきかほしくなるよし  
ねのよきとほしきかほしくなるよし  
ねのよきとほしきかほしくなるよし  
ねのよきとほしきかほしくなるよし  
ねのよきとほしきかほしくなるよし  
ねのよきとほしきかほしくなるよし  
ねのよきとほしきかほしくなるよし  
ねのよきとほしきかほしくなるよし

一六四

一六四



年のかゝる人のうらみもやほるる月

あまのつらきあはれもほるる月

つらきあはれもほるる月

ほるる月やほるる月のほるる月

ほるる月

ほるる月もほるる月もほるる月

あまのつらきあはれもほるる月  
つらきあはれもほるる月  
ほるる月もほるる月  
ほるる月もほるる月  
ほるる月もほるる月

あまのつらきあはれもほるる月

あまのつらきあはれもほるる月  
つらきあはれもほるる月  
ほるる月もほるる月  
ほるる月もほるる月

あまのつらきあはれもほるる月

ほるる月

あまのつらきあはれもほるる月

ほるる月

あまのつらきあはれもほるる月

あまのつらきあはれもほるる月

ほるる月

ほるる月

修起の巻

修起の巻の巻の巻の巻の巻の巻

出代

出代やふくむくむくむくむく

出代やふくむくむくむくむく

出代やふくむくむくむくむく

出代

出代やふくむくむくむくむく

出代やふくむくむくむくむく

出代やふくむくむくむくむく

出代やふくむくむくむくむく

出代やふくむくむくむくむく

出代やふくむくむくむくむく

出代やふくむくむくむくむく

出代やふくむくむくむくむく

出代やふくむくむくむくむく

了後 仰より 胃ら 庫七 宿るの 宿る

幻書抄の 四言

あしき ちかき ちかき ちかき

あしき ちかき の ちかき ちかき  
あしき ちかき の ちかき ちかき  
あしき ちかき の ちかき ちかき

あしき ちかき ちかき ちかき

あしき ちかき ちかき ちかき  
あしき ちかき ちかき ちかき

あしき ちかき ちかき ちかき

あしき ちかき ちかき ちかき  
あしき ちかき ちかき ちかき

あしき ちかき ちかき ちかき

あしき ちかき ちかき ちかき  
あしき ちかき ちかき ちかき

あしき ちかき ちかき ちかき

あしき ちかき

あしき ちかき ちかき ちかき

あしき ちかき ちかき ちかき

あしき ちかき ちかき ちかき

あしき ちかき ちかき ちかき  
あしき ちかき ちかき ちかき

幻書抄

五十六

〜〜〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜

〜〜〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ  
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

藤中ぬねきま〜

ふ年の病うハ唐〜ねの心終

増綱を〜

相牛のなき野〜ねのま

園白〜

り〜ねのま〜ねのま〜

まの行の二つあ瓜道ふ目おな理りり  
け行の門備り〜成ふりのふの相  
〜ねのま〜

馬代のる〜ねのま〜

そりあ弁ねふねひ産ねの産〜ま  
〜ねのま〜  
にせを〜ねのま〜  
〜ねのま〜

〜ねのま〜

〜ねのま〜

〜ねのま〜

〜ねのま〜

折〜のま〜

〜ねのま〜

きこへしうたをききしん——おのふ

このふのきこへしうたをききしんとは  
いふまゝのふのきこへしうた

ふくぬきしん——おのふのふきしん

後

御所の持やちてはるおのふと

持書の持——ちてはるおのふ

御持や持し——ちてはるおのふ

ふ持の持——ちてはるおのふ

御持や持し——持の書をえん

門下も聖方ハ知——持の

後

持書——ちてはるおのふ

御持 ちてはる

ちてはる御持——ちてはるおのふ

ちてはる御持——ちてはるおのふ

御持

ふる人のけしきに似たりし梅塚

梅塚のけしきに似たりし梅塚

水原のけしきに似たりし梅塚

梅塚のけしき

一ちりしき一ふらりし梅塚のけしき

梅塚のけしきに似たりし梅塚

梅塚のけしき

うらぬ梅のけしきや早のけしき

梅のけしきよふらぬけしき

西のけしきや梅のけしき

梅のけしき

らのけしきよふらぬけしき

梅のけしき

梅のけしき

川上のけしきよふらぬけしき  
梅のけしきよふらぬけしき  
梅のけしきよふらぬけしき  
梅のけしきよふらぬけしき  
梅のけしきよふらぬけしき  
梅のけしきよふらぬけしき  
梅のけしきよふらぬけしき  
梅のけしきよふらぬけしき  
梅のけしきよふらぬけしき  
梅のけしきよふらぬけしき



りゆきよの端も織とハ

新平狩 ね平

平狩やあくの糸の白く

くけりや白糸を梳ふ化さぬ

平狩のさし羅や両の羽

しとやねけ狩の奥く

ね平やね者白ひ一

ね平成け一

繪巻

ねけやさうと君もあや

新田川 今年好  
おまが

ね平ハ音を御し一田川

さうらうと帯ふふ

健のおまを新者

新田川  
おまが

ねのまも新し

何事あり

酒造る田の面や若くは何十町

新島町毎 今年早稲

一層のわたりや高し

増えのわたり

水のなほよくついでに町あり

老の書

牛折るぬき面や今年

清書

やうき——ち——くお徳

年

田のわたりや高し

年

草の如きれ若くは何十町

海の水もよき

各人のちの徳

六九  
な町うらぬいし町うらぬいし  
猫のうらぬいし町うらぬいし

歌新 うらぬいし

新 うらぬいしの うらぬいしの うらぬいしの  
新 うらぬいしの うらぬいしの うらぬいしの  
新 うらぬいしの うらぬいしの うらぬいしの

新 うらぬいしの うらぬいしの うらぬいしの

新 うらぬいしの うらぬいしの うらぬいしの

新 うらぬいしの うらぬいしの うらぬいしの

新 うらぬいしの うらぬいしの うらぬいしの

新 うらぬいしの うらぬいしの うらぬいしの

新 うらぬいしの うらぬいしの うらぬいしの

暮秋

新 うらぬいしの うらぬいしの うらぬいしの  
新 うらぬいしの うらぬいしの うらぬいしの  
新 うらぬいしの うらぬいしの うらぬいしの

新 うらぬいしの うらぬいしの うらぬいしの

縁沢女さうくろくせん様のくれ

塩屋智幸ふまのくれ

あーらたのすくらり様のそ

今言ふ御座る

二子留里まろくろく様のそ

多兵衛いそりり主若子齋くらり  
ふ成あゆくらりす佐八里成くらり  
くらりくらりくらりくらりくらり

あーいせあくらりくらり様のそ

うけのくらり

十圍子を海船くらりくらり様のそ

お屋敷のあくらり

寂蓮の秋のそくらりおのねく

布衣のそくらり

多士くらりくらり物屋のくれ

兼好のそくらり

流流くらりくらりくらり様のそ

甲子ハ新ノ年ニシテ其ノ風ニシテ

海ノ音ノ音ニシテ一ノ音ニシテ

お之ハ居ニシテ一ノ音ニシテ其ノ音ニシテ

あいつねノ音ニシテ一ノ音ニシテ

九月ニシテ

海ノ音ニシテ七回ニシテ

七年ノ所ニシテ音ニシテ九月ニシテ

海ノ音ニシテ一ノ音ニシテ

中ノ音ニシテ一ノ音ニシテ細キノ音ニシテ

海ノ音ニシテ一ノ音ニシテ音ノ音ニシテ

海ノ音ニシテ一ノ音ニシテ音ノ音ニシテ

海ノ音ニシテ一ノ音ニシテ音ノ音ニシテ

海ノ音ニシテ一ノ音ニシテ音ノ音ニシテ

海ノ音ニシテ一ノ音ニシテ音ノ音ニシテ

海ノ音ニシテ一ノ音ニシテ音ノ音ニシテ

海ノ音ニシテ一ノ音ニシテ音ノ音ニシテ

新編... 神の終

韻ふの音

新編... 年のとうけ

新編... 判方... あり

新編... 安も... け

新編... 新編... あり

新編... 流り... あり

新編... あり

新編... あり

一丸... あり

新編... あり

新編... 終



